

## 第 29 回（就労・教育合同）分科会報告書

1. 開催日時：平成 27 年 12 月 18 日（金） 15：00～17：25

2. 開催場所：はなやぎの里 3 階多目的ホール

3. 参加者（所属のみ）

デュナミス、筑特、さんふらわあ、八女あかり、のぞえ風と虹、夢工房、蓮の実団地、陽だまり工房、城山学園、ミライプラス、赤坂園、プラムの小径、夢と希望、八女市、広川町、リーベル

4. 実施内容

○問題提起『発達障害が疑われる学生に対する支援』

問題提起者 西日本短期大学 中野教授

○筑後特別支援学校の取り組み

筑後特別支援学校では関係機関との連携に力を入れ

ている。ここ 10 年間については、卒業後就労に繋がった割合として 3 割との分析結果が出ている。小さい頃から関係機関の支援を受けており、卒業後も何かあったときは関係機関が動いてくれる体制ができている。高校から大学へ、大学から就労へ繋がっていく中で、大学としてはどのような関係機関と繋がっていれば良いのかを検討するという事で、本日の教育・就労合同開催になっている。

○西日本短期大学について

男女共学で 6 学科あり。立地としては福浜団地（福岡ドームの近く）の真ん中にある。精神と知的の重複障害を持つ学生が入学してくることがあるが、入学してきた様子で専門家のいない状態で各学科が対応している。背景

として、少子化のあおりで入試を受けた者はほとんどが入学できる情勢になっている。

○検討事項（問題提起） - 発達障害が疑われる学生に対する支援

常に表情が硬く、相手の目を見て話せない、何度も同じ質問をする、限られた学生としか交流せず「浮いた存在」の学生。介護実習の評価を通して両親との面談にて、親としては高校時代から障害を疑っていたが、高校からは指摘がなかったため進学と資格取得を勧めたことが分かった。在学中に更生相談所の検査を受けている。学校として、どのような取り組みが必要であったか。



問題提起後、A～Fの6グループ（就労、教育の委員を合同で編成）に別れて協議を行いました。

#### ○協議事項

①事例のような生徒が学校に入学してきた際、学校として取り組むこと、配慮できること。

A：幼稚園・保育園は成長の中で、小学校時代は面談等の中で本人の障害がわかってくることが多い。入園（入学）前に情報が入ってくるのが望まれる。



B：親御さんの障害の受け入れが難しく、どうやって保護者の理解を得るか。その子にあった指導を行いたいので検査の提案を保護者にするが抵抗がある。

C：教師間の情報共有。SW、SCに繋ぐ。担当だけではなく、見る目を増やす。保護者にどう伝えるかが課題。

D：気になる生徒がいる場合、サポートリスト、チェックシートを作成し校内会議で全体的に把握していく。専門的などころがあれば、紹介してもらう。

E：(①～③をまとめて検討)

所属からの障害特性の引き継ぎがほしい。本人にあった環境を作り、担任のみならず各学科の先生との情報共有が必要。気になる生徒は実習先に先生が顔を出すことで生徒と事業所との橋渡しになるのでは。友人以外にも相談できる場所を作っていく。保護者のケアを考える。手帳を持ってない人の支援については、受診にどう繋げるかが難しい。本人の良さを引き出してサポートしていく。

F：SCに相談し、社会資源の利用に繋げていく。担任の話から行動の特徴を捉える。アウトリーチが必要。情報共有が大切。

②どのような関係機関と繋がっていけばよいか。

A：教育委員会等の教育機関や就労・生活支援センターなど。

B：一人で悩まず、同じ悩みを持つ人たちとの情報交換。手帳や年金については障害を持っているというレッテルを貼られたような気になるが、将



来のためにはプラスになるというメリットを伝えることが大切。

C：(検討する時間がとれなかった)

D：役割分担をしていくことが必要。

E：①参照

F：巡回相談、相談支援、デュナミス、施設、行政、様々な機関との連携が必要。

③受け入れる側(就労支援事業所)ができること、教育機関で何をしておいてほしいか。

A：多くのことを体験することが大切。

コミュニケーション力が大事。

B：情報を次のステップに繋げていくことが必要。

C：高校までの間で適性判断をしてほしい。現場実習が大事。

D：その生徒のコミュニケーション方法や特徴を伝えてもらいたい。特に障害特性はしっかり伝えてもらう。本人の希望に沿って、本人の納得した仕事を行う環境を作っていく。

E：①参照

F：コミュニケーション(挨拶、SST、返事、ジョブマッチング、ヒューマンマッチング)。本人の力を伸ばしていく。集団適応能力を身につける。

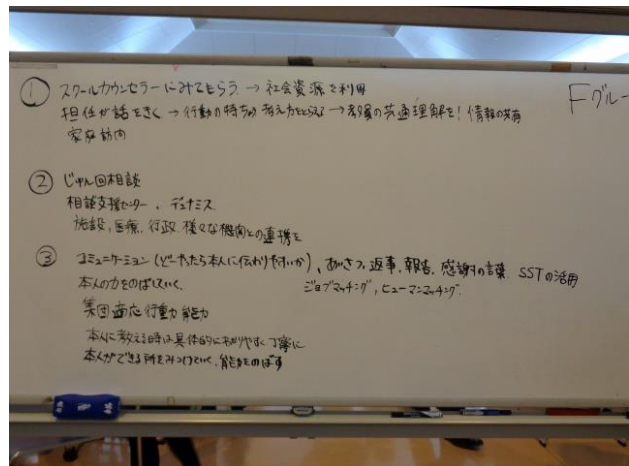
#### ○現在の支援について

進路指導部の協力を得て、障害者就労支援センターを利用し、精神保健福祉手帳3級を取得。就労体験を通し、適職への支援を受けた。最終的には両親の紹介先に就職し、



現在は精神的にも安定している様子。学校としては、障害者が在籍しているということは対面的には出たくないところがある。充実した学生生活のためには学校全体が組織として相談窓口を作るべき。西日本短期大学では適性検査の導入には至っていない。SCは配置しているが非常勤のため、教師側との連携がうまくはかかれていない状況。

社会資源と繋げる役目としてSWが望まれる。



### ○まとめ：教育分科会

進学校で有名な灘高校はアスペルガー系の生徒が多い。進路指導時に医療分野を希望した場合、臨床分野ではなく研究職が向いているという特性を伝えているとのこと。ジョブマッチングが必要。筑後特別支援学校にて発達障害の生徒をインターンシップで10日間受け入れた。対応に配慮し、実習を無事に終えることができた。本事例も実習先で、対応について配慮できなかったのか。環境調整が必要。

実習中に配慮してもらおうと、一般就労した時に失敗するので、現在は配慮をしすぎないようにしている。実習先にも配慮しなくて良いと伝えている。(中野教授より)

### ○まとめ：就労支援分科会

聞き取りの中で、生い立ちやこれまでの経緯を聞くと、事業所を退職した理由としては人間関係が多いことがわかる。支援者側としては、安全な道を進ませるために、偏った情報を与えているところもあるのかもしれない。環境変化としては、以前は勤務先に支援者として連絡を入れると会社側は話も聞いてくれない状況であったが、現在は「(支援者も)一緒に来てください」と言われるようになった。

